

Title	ポール・ ボウルズと大衆音楽
Sub Title	
Author	大串, 尚代(Ogushi, Hisayo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2003
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.84, (2003. 6) ,p.98(145)- 107(136)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2002年度藝文学会シンポジウム：「文学と音楽」
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00840001-0107

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

聴覚で感じる芸術と、文字を眼で追うことによって物語を構築する文学との接点は、考えてみるとなかなか難しいテーマである。このテーマに一番ふさわしいのは、音楽家であり作家である人を捜せばいい、ということになるだろう。作曲家や指揮者、あるいは本日パネリストとしてお越しいただいた青柳いづみ氏や中村絃子氏のように、ピアニストであり、かつ文筆の世界でも活躍してる方々は少なくない。だが作家であり作曲家である人物、つまり作家としての活躍の方が目立つ人物でありながら、なおかつ実は作曲家でもあった、という人物を思いつくことがあるだろうか。

しかし幸運なことに、私が専門としているアメリカ文学の中に、丁度うってつけの人物を見つけることができる。それは、最後のモダニストと呼ばれ、ビートニクス作家たちの先駆者といわれ、越境作家などと称される、ポール・ボウルズ（1910～99年）である。ボウルズは、その人生の大半を本国アメリカの外、おもにモロッコのタンジールで暮らしていたことから、80年代から90年代にかけて、ボーダーレスな作家として一躍日本でもその名を知られる作家となる。ボウルズがその経歴において特徴的であるのは、小説家としてデビューする前に作曲家としての地位を確立していた点につきよう。

ポール・ボウルズには四つの側面がある。ひとつは詩人としての側面である。弱冠18歳でパリで刊行されていた国際的文芸誌〈トランジション〉にブルトンやエリュアールと並んで詩が掲載され、詩人としてこれ以上ない幸運なデビューを果たしている。ただし、ガートルード・スタインに自作の詩を酷評されたことで、詩人の道を諦めたとボウルズはのちに回想している。

もう一つの側面が、作曲家としての側面だ。1950年代までの彼の人生

の前半に、ボウルズは主に作曲家としてのキャリアを築いていった。正規の音楽教育を受けていないボウルズは、1931年に会ったアーロン・コーブランドに作曲法を習ったのみで、生涯自らのことを“An Untrained Composer”と認識していた。アメリカ本土、南アメリカやアフリカを行き来しながら作曲家として活躍し、1930年代から40年代にかけて、ウィリアム・サローヤン、テネシー・ウィリアムズ、リリアン・ヘルマンらの舞台音楽を担当している。一般に、彼が小説家への転身を図ったのは、妻ジェイン・ボウルズの作家活動に触発されたため、と言われているが、ボウルズ自身は作曲家から作家への方向転換について次のように語っている。「たしかに作曲家時代は、なにかを生産していたけれども、それをしながらも、自分がいつも誰かの要求を満たしているような感じがしていた。他人が考えたことに彩りをつけ、意図をくみ取るような音楽を作っていた。(中略) わたしは、自分がうっかりと関わるようになってしまった、この音楽という世界から飛び出したい、という欲望がゆっくりと頭をもたげてくるのを感じざるをえなかった」(『止まることなく』273-74頁)。ボウルズの1940年代は、作曲家と作家という、まさに二足の草鞋をはいていた時代であり、1945年にはアメリカの〈ヴェユ〉誌に短編「蠅」を発表し、サルトルの「出口なし」を英訳したのち、作家活動を本格化させ、1949年に初の長編『シェルタリング・スカイ』を出版してからは、目立った作曲活動をしていない。

詩人、作曲家、作家というキャリアを積んだボウルズは、1960年以降タンジールに本格的に定住したところから、現地のマグレブ語の作家の翻訳やアフリカ音楽の収集という、エスノグラファー（民俗学者）としての側面も見逃すことはできない。このように、さまざまな側面を持つボウルズだが、今回のシンポジウムでは、ボウルズが作曲家から作家へと転身するきっかけとなった1949年出版の『シェルタリング・スカイ』と、大衆音楽との関わりを考えてみたい。

ポール・ボウルズという人物は、長らくアメリカ文学史では忘れられた

存在であった。作家としてのキャリアを積み出した1940年代後半から、アメリカに暮らすことは少なかったボウルズは、60年代以降タンジールに定住し、95年まで母国の地を踏むことがなかったからである。ところが、80年代に入ってから、作品がブラック・スパロウ出版社からリプリントされたのを契機に、折からのマルチ・カルチュラリズムの思潮的な波に乗り、ボーダーを越境した作家として注目を浴びることとなった。さらに1991年『シェルタリング・スカイ』の映画化によって、ボウルズは文学的復活を遂げる。このように、作家として注目をあびるようになったのが80年代から90年代かけてのことであるが、ボウルズが20世紀の前半に作曲家であったことに対する評価というのは、それからさらに遅れることになる。というのも、ボウルズは映画音楽や舞台音楽を多く手がけていたが、それらのスコアのほとんどが舞台関係者や映画会社のずさんな管理のせいで失われたからだ。

さて、このボウルズの作曲家としての側面が大きく注目されるようになったのは、ジョナサン・シェーファーを中心とするEOS music incが、ボウルズの音楽フェスティバルを1995年9月にリンカーンセンターで開催したことに端を発する。この後、1996年にはボウルズ作曲による組曲「パストレラ」、「二台のピアノのためのコンチェルト」、ボウルズ自身の詞や、妻ジェイン・ボウルズ、ガートルード・スタインの詞に曲をつけた歌曲などが収録されたCDが発売され、わずかではあるものの、ボウルズの音楽を耳にすることができるようになった。

ボウルズの音楽フェスティバルの立て役者であるシェーファーが語っているように、ボウルズの音楽の特徴とは、さまざまな音楽のコラージュになっている点を指摘することができる。もちろん、作家としてのボウルズが異国文化を取り入れた混沌とした世界を描いたことと、作曲家としてのボウルズがさまざまなジャンルの音楽を混ぜ合わせ、ジャンル混淆的な音楽を作り上げたということに、パラレルな関係を見出すのは難しいことではない。しかし、私がここで着目したいのは、ボウルズがブロードウェイやティン・パン・アレーなどの、いわゆる大衆音楽に、ボウルズ自身気が

つかないほど、ことのほか強い影響を受けていたのではないか、という点である。その影響が重要だと思われるのは、音楽的な影響にとどまらず、ボウルズの作家としての、つまりボウルズ文学にも深くかかわっている可能性があるからだ。

そのことを考察するにあたって鍵となるのは、小説『シェルタリング・スカイ』である。

先にも述べたとおり、『シェルタリング・スカイ』は1991年にベルナルド・ベルトルッチによって映画化されており、ボウルズ作品の中ではいちばん知名度の高い作品といえる。この小説は、アフリカはアルジェリアを旅するアメリカ人の物語である。ポール・ボウルズとジェイン・ボウルズの夫婦を彷彿とさせる、作曲家ポート・モレズビーとその妻で作家のキットは、第二次世界大戦後まもなくのアルジェリアに到着し、西洋の文化圏とは全く異なる土地を移動し続ける。もともと結婚生活が息詰まっていた二人は、この旅でその状況を打破できるチャンスを窺うも、二人の溝はいっこうに埋まることはない。

存在論的不安が前景化する本作品では、お互いが抱えるいいようもない不条理な存在への不安が散見される。

“You know,” said Port [...] “The sky here’s very strange. I often have the sensation when I look at it it’s a solid thing up there, protecting us from what’s behind.”

Kid Shuddered slightly as she said : “From what’s behind?”

“Yes”

“But what is behind?”

“Nothing, I suppose. Just darkness. Absolute night.” (89, 下線部引用者)

ここでは、空がその向こうに広がる「完全なる夜」から人々を守る

(protecting) ものであることが明らかにされ、小説のタイトルになっている The Sheltering Sky のモチーフを見て取ることができる。その後、アルジェリアを南下する途中でポートは流行病にかかり、砂漠の真ん中で命を落としてしまうのだが、ひとり取り残されたキットは、たまたまとおりの現地の商隊（キャラバン）に加わり、隊長であるベルカシムという人物の愛人になることで生き抜いていく。最後にアメリカ領事館に保護されたときには、彼女の精神は異常を来していた。物語の結末部分で空を見上げたキットは、誰かがむかし「空が自分たちを守ってくれる」と話してくれたことをぼんやりと思い出す、という場面があり、物語の最後でふたたび「庇護してくれる空」すなわち “sheltering sky” のイメージが繰り返される。

Before her eyes was the violent blue sky-nothing else. For an endless moment she looked into it. Like a great overpowering sound it destroyed everything in her mind, paralyzed her. Someone once had said to her that the sky hide the night behind it, *shelters* the person beneath from the horror that lies above. (280頁)

音楽とこの小説の関連性はどこにあるのか。主人公のポートが作曲家であること以外、とりたてて音楽が強調されることのないこの物語と音楽は一見無関係のようにみえるだろう。だが、タイトルにもなっており、物語中に何度か繰り返される「シェルター」という「防御」のイメージをボウルズが得たいきさつは、『シェルタリング・スカイ』と大衆音楽との接点を示している。

Before the First World War there had been a popular song called “Down Among the Sheltering Palms” ; a record of it was at the Boat House in Glenora, and upon my arrival there each summer from the age of four onward, I had sought it out and played it before any of the

others. It was not the banal melody which fascinated me, but the strange word “sheltering.” What did the palm tree shelter people from, and how sure could they be of such protection?

The book was going to take place in the Sahara, where there was only the sky, and so it would be *The Sheltering Sky*. (Sawyer-Locanno 257, 下線部引用者)

ボウルズが繰り返し聴いていた曲とは、エイブ・オールマン作曲、ジェイムズ・ブロックマン作詞による“Down Among the Sheltering Palms”というポピュラーソングである。この曲はヒットソングとなった「スワニー」や映画『ジャズ・シンガー』などで、20世紀初頭のポピュラー・ミュージック界のスターであったアル・ジョルスンにより有名になった曲であるが、ボウルズは自分が惹かれたのは、「その歌の凡庸なメロディではなく、“Sheltering”という言葉の使い方だった」告白している。次に引用するこの曲の歌詞は、小説に見られるような不安のかけらも感じられないほどあっけらかんとしているが、要所要所で“ing”で韻を踏んでいることから、確かに“Sheltering”という語が印象的に耳に残る曲となっている。

Down among the sheltering palms
Oh honey, wait for me
Don't be forgettin' we've got a date
Out where the sun goes down about eight
How my love is burning, burning, burning
How my heart is yearning, yearning, yearning
To be down among the sheltering palms
Oh honey, wait for me

いったいこの曲はどこを歌ったものなのだろうか。Sheltering Palmsが

ある場所はいったいどこにあるのだろうか。大衆文学研究家であるギルバート・セルデスはこの「覆い被さるような椰子の木」のイメージを黒人大衆音楽の文脈で語り、エキゾティズムをかき立てるものであると指摘している（セルデス 63）。そのエキゾティズムはラグタイムという音楽ジャンルに属するこの曲のひとつの特徴といえるかもしれない。この歌を作曲したエイブ・オールマンは、1910年代にかずかずのラグタイムを作曲した人物であり、作詞を担当したジェイムズ・ブロックマンも作詞家でありながら、ラグタイムを作曲してもいる。1910年生まれのボウルズは四歳の頃からこの曲を聴いていたと語っていることから、“Down among the Sheltering Palms”が1914年に流行した同時代にこの曲を聴いていたことになる。ラグタイムという音楽ジャンルはあらゆるフォーク・ミュージックをラグ化することができる、というセルデスの指摘や（72頁）、シンコペイトするリズムによって、アニー・ローリーでさえラグタイムになる、というピーター・ファン・デル・マーヴェの説明などから、ラグタイムという黒人音楽でありながら、さまざまな音楽を吸収する、いわば音楽の混成が可能なジャンルと Sheltering Palms という歌詞の内容は、前述のシェーファーが語るボウルズの音楽的なスタンスを象徴するとともに、ボウルズの小説作品『シェルタリング・スカイ』に、じつはふさわしい曲であるとひとまず考えることができるだろう。

だが、ここに興味深い事実がある。前述した“Down among the Sheltering Palms”の歌詞は、現在一般的に知られているバージョンではあるが、これが完全な歌詞ではない。もともとブロックマンが作詞した歌詞は、次のようなものであった。

Verse 1

I'm way down east, down east,
And my heart is pinning, pinning for you,
You're way out west, out west,
And my soul is craving, craving for you,

I love you so, just you I know,

It takes six days to go there with a train,

Just one week more and I'll be with you again,

I long to be

Verse 2

When I was south, down south,

There I saw some pretty, pretty places

When I was north, way north,

I saw many many pretty faces

Not one so fair, none could compare

There's only one place out in the west,

And you are there, where with you I long to rest

I long to be

Chorus

Down among the sheltering palms

Oh Honey wait for me

Meet me down by the old Golden Gate,

Out where the sun goes down about eight

2 second edition

Down Among The Sheltering Palms

Words by JAMES HINDROCKMAN Music by ABE HILMAN
Moderato

The musical score is written for voice and piano. It begins with a piano introduction in E-flat major, 4/4 time, marked 'Moderato'. The melody is simple and lyrical. The lyrics are: 'the way down east... down east... And my When I was south... down south... There I'. The score continues with a piano accompaniment that features a steady eighth-note pattern in the right hand and a more active bass line in the left hand. The lyrics continue: 'I long to be with you again, I long to be'. The score then transitions to a new section, marked 'Verse 2'. The lyrics are: 'When I was south, down south, There I saw some pretty, pretty places When I was north, way north, I saw many many pretty faces Not one so fair, none could compare There's only one place out in the west, And you are there, where with you I long to rest I long to be'. The score concludes with a piano accompaniment that features a steady eighth-note pattern in the right hand and a more active bass line in the left hand. The lyrics continue: 'I long to be'. The score then transitions to a new section, marked 'Chorus'. The lyrics are: 'Down among the sheltering palms, Oh Honey wait for me Meet me down by the old Golden Gate, Out where the sun goes down about eight'. The score concludes with a piano accompaniment that features a steady eighth-note pattern in the right hand and a more active bass line in the left hand. The lyrics continue: 'I long to be'.

How my love is burning, burning, burning,
How my heart is yearning, yearning, yearning,
To be down among the sheltering palms,
O Honey wait for me.

ではここで今一度この曲の歌詞をおってみたい。ここで歌われているのは、「椰子の木」が喚起するような異国の物語ではない。Verse 1にあるとおり「わたしは東部に向かうところ、でも私の心は貴方を追うの、だってあなたは西に向かっている、だから私の心はあなたにこがれるの、愛しているの、あなただけ、6日たったなら汽車に乗ってそこにいくわ」という歌なのである。さらに、コーラス部分を見てみると、一般的に現在流布している歌のバージョンでは「デートの約束忘れちゃだめよ」という“Don't be forgetting we've got a date”というところは、もともと「ゴールデン・ゲイトのたもとで会いましょう」「Meet me down by the Old Golden Gate」という歌詞であったことがわかる。つまり、西部にいる恋人に会う、そこはゴールデン・ゲイトがある……となれば、これはサンフランシスコ以外にはないだろう。

アメリカ国内のことを歌っていたはずのこのラブソングが、いつのまにか国外をイメージさせるエキゾチックな歌に変化していったのがいつからか特定することは残念ながら現段階ではできない。だが、この第一次世界大戦前に作られた歌が、歌詞を一部改変する形で伝わり、1940年代のボウルズ作品へと取り入れられたのは、ボウルズの単なる思いつき以上の背景があるのではないか。

このラブソングは、そばにはいない恋人を恋いこがれる歌だが、ボウルズの小説とこの歌との間には、単に sheltering という言葉を借りた以上の関係性があるように思われる。ここでいまいちど『シェルタリング・スカイ』の物語に立ち戻ってみよう。端的に言ってしまえばこの物語は愛の回復を試みる物語である。しかし庇護（シェルター）を求めなければならな

いほどの不安の中で、ふたりは愛を永遠に回復ができない。言い換えるなら、残されたキットには、愛の回復を期待することしか残されず、それはいわば宙ぶらりんの状態でしかない。そのとき、もともとこの歌から待ち合わせの具体的な場所（つまりゴールデン・ゲート）を剥奪されたこの“Down Among the Sheltering Palms”は、デートの約束を忘れてしまうかも知れない、来るか来ないかわからない恋人を期待する歌としての再解釈が可能となる。恋人が待つ Sheltering な場所に対して Burning, Yearning しているこの歌は、小説『シェルタリング・スカイ』が持つ通俗性を露呈させるとともに、1940年代という、実存主義的な存在の不安をかかえた第二次世界大戦後のアメリカ思潮を写し出すことになる。ここに至ってボウルズは Sheltering という奇妙な言葉に反応したと考えるとき、大衆音楽が文学と結びつく瞬間を認めることができるのである。

Bowles, Paul. *The Sheltering Sky*. 1949. London : Paladin, 1990

Caponi, Gena Dagel. *Conversations with Paul Bowles*. Jackson : UP of Mississippi, 1993.

——. *Paul Bowles : Romantic Savage*. Carbondale: Southern Illinois UP, 1994.

Swan, Claudia, ed. *Paul Bowles Music*. New York : EOS Music, 1995.

Sawyer-Laucanno, Christopher. *An Invisible Spectator*. New York : Ecco, 1989.

Seldes, Gilvert. *The 7 Lively Arts : The Classic Appraisal of the Popular Arts*. 1924. Tronto : Dover, 2001.

ピーター・ファン＝デル＝マーレ『ポピュラー音楽の基礎理論』中村とうよう訳 ミュージック・マガジン、1999年。

四方田犬彦監修『特装版 ポール・ボウルズ』思潮社、1990年。